

**過去3年間の  
NRPAシンポジウム抄録にみられる  
レジャー・レクリエーションの研究動向  
— 1992～1994年 —**

○ 栗原 邦秋

高橋 和敏 (余暇問題研究所)

KEYWORD: 北米レジャー・レクリエーション研究 NRPA研究 シンポジウム

## I 研究の動機

わが国においては、日本レクリエーション研究会発足以来からレジャー・レクリエーション分野の研究活動が行われてきた。矢川らは('81年)、レジャー・レクリエーション諸研究344題を収集し分析し、将来への方向性提起を試みた。日本レクリエーション研究会発足以来からの研究動向を把握し将来への方向性提起を試みた。大森らは('82年)、自然公園制度発足50年を契機とした過去のキャンプに関する112事例を収集ならびに分析を施してその傾向を示し、後続する研究者への寄与を図った。

北米においては、Riddick他は('84, '91年)、Journal of Leisure Research誌に掲載された諸研究について方法論の評価法を考案し、後続する研究レベル向上への寄与を図っている。Valeriousら('92年)は、博士論文に着目し、先駆的研究の方向性を求めて80年代に発表された博士論文144題の動向を報告している。Bedini他は('92年)、Riddickらの手法を用いて治療的レクリエーション研究事例の方法論的評価を施し、研究レベル向上へ示唆を行っている。

これら過去の研究動向事例では、共通して、1)先行研究掌握の重要性とその利便性向上及び、2)将来の研究方向性の提起、をその目的として行われている。

本研究は、これら研究動向を分析した先駆の事例から示唆を受け、その重要性の認識を動機としている。

## II 研究目的

近年のレジャー・レクリエーション研究事例を整理することにより、1)各領域での先行研究例掌握での利便性を得ること。及び、2)さらに収集した研究事例を分析・整理することによって将来の研究方向性に対する示唆を得ることである。

しかしながら、本研究の直接目的は、過去3年間に開催されたNRPA年次大会における研究シンポジウムでの発表論文抄録集を資料とし、これに納められた研修抄録を分類整理し分析を施すことにより研究動向を概観することに止まる。したがって、Riddickらによってなされた諸研究の評価には至らない。

## IV 研究方法

入手した「NRPA研究シンポジウム抄録集(1992～1994)」にある285題を分類整理した。研究領域分類にあたっては、NRPA Research Symposiumでの類型に従った。分類した研究事例数の出現比率、その傾向を把握することにより動向ならびに特徴を求めた。

## V NRPAおよびシンポジウムについて

National Recreation and Park Association (全米公園レクリエーション協会) は、1966年1月にレクリエーション運動推進を目的に関連する団体を統合されたサービス団体である。本部をVirginia州 Arlingtonに置き、ブランチやセクション10団体を傘下にもつ。しかしNRPAの母体の歴史は古く、1906年の National Playground Asso. の設立、1911年に Playground and Recreation Asso. と改称し、さらに1930年、National Recreation Asso. となり現在に至っている。公園などの施設・設備に関連する”ハードウェア分野”と研究教育者および実践家の”ソフトウェア分野”が統合されていることに特徴される。

年次大会は毎年10月に開催される。Research Symposiumの他、分科会、コンベンションが並行して行われる。過去3回の開催は、1992年Cincinnati, Ohio、1993年San Jose, California、1994年Minneapolis, Minnesotaである。

このシンポジウムは、わが国では本学会大会に匹敵するものと言えよう。

## VI 1992年～'94年 NRPR Research Symposium発表研究の動向

表1. 研究領域別発表数

( 研究領域 )	1992年	1993年	1994年	Total (%)
1. 生涯レジャー	11	11	11	33 (11.6)
2. 専門教育・カリキュラム	5	6	6	16 (5.6)
3. 障害者レジャーサービス・プログラム	8	20	10	38 (13.3)
4. 人文科学系レジャー研究	8	6	7	21 (7.4)
5. レジャーサービス・プログラム管理	13	14	7	34 (11.9)
6. レジャー研究方法論・統計・デザイン	6	5	8	19 (6.7)
7. 野外レクリエーション・マネージメント	5	8	7	20 (7.0)
8. 心理学・社会心理学	18	10	11	39 (13.7)
9. 社会学	8	5	8	21 (7.4)
10. 観光・レジャー研究	8	13	23	44 (15.4)
Total	90	98	97	285 (100.0)

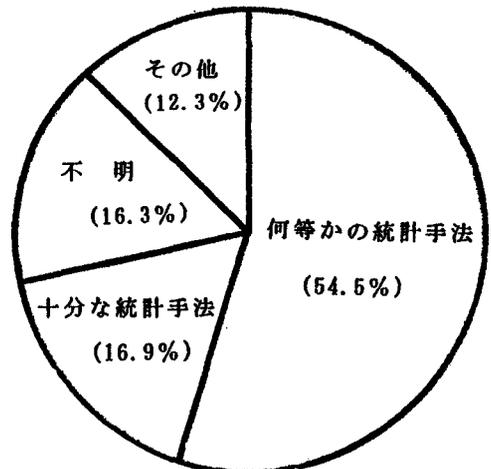
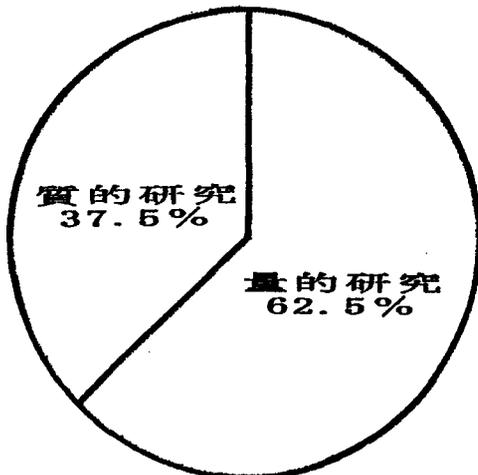


図1. 質的 vs 量的研究 図2. 量的研究の分析方法

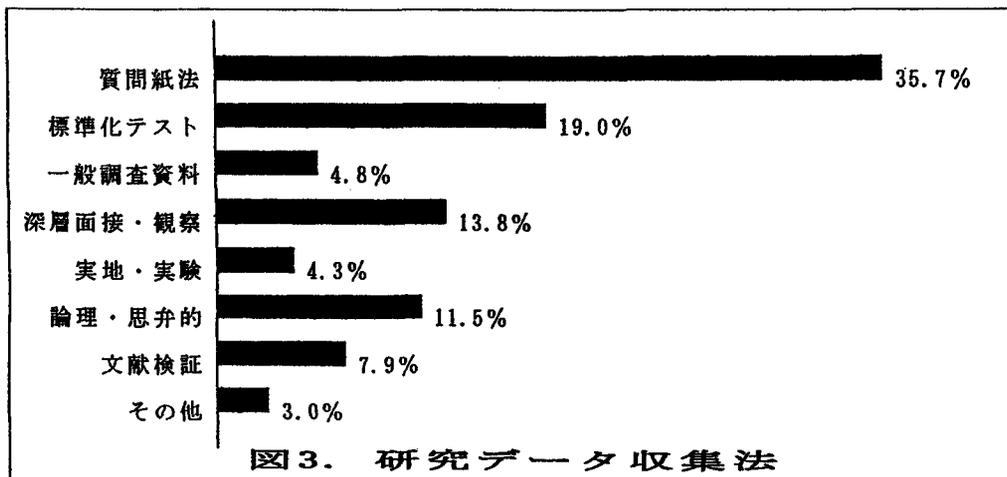


表2. 研究領域別発表者・共同研究者数

(研究領域)	1992年	1993年	1994年	Total (%)
1. 生涯レジャー	22	16	20	58 (10.4)
2. 専門教育・カリキュラム	8	10	7	25 (4.5)
3. 障害者レジャーサービス・プログラム	20	44	25	89 (15.9)
4. 人文科学系レジャー研究	16	13	10	39 (6.9)
5. レジャーサービス・プログラム管理	24	35	13	72 (12.9)
6. レジャー研究方法論・統計・デザイン	12	13	14	39 (6.9)
7. 野外レクリエーション・マネジメント	10	16	15	41 (7.4)
8. 心理学・社会心理学	32	18	22	72 (12.9)
9. 社会学	12	9	16	37 (6.6)
10. 観光・レジャー研究	15	28	44	87 (15.6)
Total	171	202	186	559 (100.0)

表3. 所属機関別発表者・共同研究者数

	(大学)	(他機関)	Total (%)
1992年	167	4	171
1993年	178	24	202
1994年	177	9	186
Total	522 (93.4)	37 (6.6)	559 (100.0)

表4. 大学別研究発表者・共同研究者数

(大学名)		1992年	1993年	1994年	Total
1. U. of Waterloo (B M D)		11	11	17	39
2. Clemson U. (B M D)		20	2	9	31
3. U. of Georgia (B M D)		9	4	15	28
4. U. of Illinois (B M D)		10	11	5	26
5. Texas A & M Univ.		11	7	4	22
6. Pennsylvania State U. (B M D)		10	4	4	18
7. U. of Manitoba		4	4	9	17
7. Arizona State Univ. (B M)		4	6	7	17
7. U. of N. Carolina C.H. (B M)		3	8	6	17
10. Kent State U. (B)		4	1	7	12

※ B ... 学士 M ... 修士 D ... 博士課程

## VII 1992～'94年 NRPA Research Symposium 研究傾向とその特徴

1. 研究領域：「観光・レジャー」「心理学・社会心理学」「障害者レジャーサービス・プログラム」での発題が多い。とくに「観光・レジャー」領域では発題に増加傾向がみられ、反対に「レジャーサービス・プログラム管理」では減少傾向がうかがえる。
2. 質的 vs 量的研究アプローチ：量的アプローチを試みる事例が多い。一方で質的アプローチ研究は増加傾向にあると見られ、均等化に近づいていると受けとめられる。
3. データ収集法：「質問紙法」を用いる事例が圧倒的に多い。次いで「標準化テスト」となる。「深層面接法・観察法」にみる精神分析的手法に増加傾向が見られる。
4. 数量分析手法：量的研究では「基本統計手法」が多い。次いで「多変量解析法」を用いた分析を施している。その主流は「因子分析」「分散分析」「重分散共分析」「回帰分析」「クラスター分析」「重回帰分析」などが多くみられる。
5. 領域別発表・共同研究者：「障害者レジャーサービス・プログラム」領域での数く、発題数との関係で見ると、この領域での研究は複数によるチームで取りくむ性質があるとみられる。
6. 発表・共同研究者の所属：大学機関に所属する者が圧倒的に多い。専門研究教育機関としての確立状況の高さを推察させられる。他機関では、National Park Service、USDA Forest Service、Metroparks、病院があげられる。
7. 大学別発表数：カナダ、ウォータールー大学からの研究発表がコンスタントで多い。他では、専門学科を設置する大学機関からの発表がコンスタントである。

## VIII まとめ

本研究によって、北米でのレジャー・レクリエーション研究動向の概要を把握することができた。しかし、これはあくまで年次シンポジウムにみられる発表研究であり、その全貌を表現しているとは限らない。したがって、今後は他の研究誌についても検討する必要性を感じる。シンポジウムについてはParks & Recreation誌に、その論評が記載されている(K. Henderson)。1994年については、研究者と実践家についての論評がみられ、それによると、研究が果して実践の場に役立っているかが問われ、その関係の重要性を示唆している。この点については、わが国においても重要な課題として受け止めたい。

短絡的に比較することは避けたいが、わが国の状況よりは、その量的、質的両面において進歩していると言わざるを得ない。